

オウム元死刑囚との交流を通して学んだこと

平野 喜之

みなさん、こんにちは。石川県かほく市高松の真宗大谷派浄専寺住職の平野喜之です。今日は「オウム元死刑囚との交流を通して学んだこと」というタイトルでお話させていただきます。オウム元死刑囚とは、二〇一八年七月六日に死刑が執行された井上嘉浩くんです。彼は一九六九年一二月に京都市太秦で生まれました。洛南高校出身です。私も一九六四年一月に京都市で生まれまして、洛南高校出身です。私と彼は洛南高校で宗教を習った先生が同じだったというご縁で、彼と知り合い、面会し、手紙で交流することになりました。私は正直に申しますと、井上嘉浩くんと出会うまでは、死刑のことに全く無関心でした。それが、「どうして無関心だったのだろうか？」というところから、死刑という問題をみなさんと考えていきたいと思えます。

みなさんが「死刑」という言葉を耳にするのはどんな時でしょうか。日常生活の中では

あまり耳にしないですよ。私が小学生の頃には『がきデカ』という漫画がありました、何か事あるごとに主人公が「死刑！」と叫んでいましたけれども、普段のニュースではあまり見聞きしないと思います。それはどうしてかということ、死刑判決の時か、死刑が執行された時ぐらしかマスコミが取り上げないからです。まずそれが一つ考えられると思います。しかし、それだけだろうか？と思うわけです。私の場合は「死刑」という言葉を普段から耳にしなかっただけじゃなくて、死刑囚が拘置所の中で、どのような生活をしながら、どのように罪と向き合っているかとか、死刑囚のご家族がどのような思いで暮らしているのかとか、そういうことに全く想像が及ばなかったから、ということがあります。

みなさんはどうですか。死刑囚は普段どこにいますか。刑務所でしょうか。拘置所でしょうか。死刑囚は、死刑が執行された瞬間に罪が償われると考えますので、実は、いるのは刑務所ではないんです。償いつつあるわけじゃなくて、命が奪われた瞬間に償われたことになりますので、刑務所ではなく拘置所にいるんです。私はそういうことさえ知らなかったんです。死刑囚の生活も分からないし、死刑囚の家族がどんな気持ちで生活をしているのか、世間からどんな目で見られているのか、ということさえ全く考えなかったんですね。自分と事件の被害者を重ね合わせて考えることはあっても、自分と加害

者とを重ね合わせて考えることがなかったからだと思います。そして、これはたぶん私だけではないと思います。

私は、井上嘉浩くんを支援していた高校の恩師と一緒に、洛南高校とご縁のある方々と会って話をすることがあります。やっぱり「許せない」という意見が多かったです。たまたま、自分の息子が地下鉄に乗っていて、そこにサリンが撒かれた場合、絶対に許すことはできないという意見が圧倒的に多かったです。

実は、洛南高校からオウムに入信したのは井上嘉浩くんだけではありません。私と同じく洛南高校を出て金沢大学の理学部数学科に入ってオウムに出家してしまった方がいて、その方を脱会させようと活動したことがあったんですが、彼を脱会させようとして一緒に連れていった友達がオウムに入信してしまっただけで、未だにオウムの後継団体である「山田らの集団」の幹部として活動しているんですね。それに私自身も責任を感じていたので、高校の恩師から井上くんと交流してくれと頼まれた時、最初は断ったんですけど、井上くんのご両親と会って少し心が動かされ、オウムに出家してしまった私の友達の安否を尋ねようと、井上くんの手紙を出したら、友達は生きていて、アレフというオウムの後継団体にいることが分かったんです。現在は「山田らの集団」というところに入っていて、元気に

はしてゐるみたいですが。

話が少し横に逸れました。洛南高校からオウムに入信してゐる人は井上くんの他にもいます。でも、たまたま自分の息子が地下鉄でサリンを撒かれる、というのと同じくらい、たまたま自分の息子がオウムに勧誘されて教祖に「サリンを撒け」と指示されたら同じことをやったかもしれないという、加害者側としての発想はしきりです。被害者に対しては可哀想だなと思うんですけど、自分が加害者になったらどうなるんだろう、自分の家族はどうなるんだろうということは、あまり考えない。人間のそういう思考の癖もあると思います。被害者側の立場でしか物事を発想できない。加害者の人生など、私には関係がない。加害者は、命を奪つたんだから、命をもつて償うのが当然だと、その程度にしか考えない。私もそうとしか思えなかつたし、疑う余地もありませんでした。そういう私が、井上嘉浩くんと出会いました。もし彼が無期懲役だったら、私の中で死刑は問題にならなかつたかもしれませぬ。たまたま最高裁で彼の死刑が確定してしまつたものだから、私は死刑囚となつた彼と付き合いながら、どうして今まで死刑のことを考えなかつたのか突き詰めると、被害者側の立場でしか物事を考えることができなかつたからじゃないのかなと思つたんです。ここが今日の話の核になるところです。

もう少し突っ込んだ話をします。どんな背景があつて、その人は事件を起こしたのだろうか。被害者にしか視線が向かなかつた私は、当然そんなことはあまり考えませんでした。そのような事件を起こすまで追い詰めた一因には社会的背景があるとか、もしかしたら、社会から差別されていたかもしれないとか、いろんな状況があつて追い詰められたかもしれないとか、だとしたら、その社会に生きている自分にも責任がある…、とは考えなかつたんです。事件を起こした人間に全ての責任があるんだと考えてしまうわけです。じゃあ、このオウムの事件はどうだったのか。

オウム事件の背景には、若者の悩みに真摯に耳を傾けようとしないう宗教者たちがいたんじゃないかなと思います。形骸化して風景となり果ててしまつたお寺があつたんじゃないのかなと思います。あるオウム真理教の幹部が言つた有名な言葉です。「日本のお寺は風景でしかなかつた」。悩みを聞いてもらつたとか、仏教を勉強するとか、お寺はそういう場所として若者の目に映らなかつたということがあります。

実は、私は大学生の頃に一度、キリスト教を真剣に勉強をしようと思つた時期があります。最初に行つてしまつたのがあるカルト教団だつたんです。キリスト教の教会は、割と真面目に一週間に一回は聖書を勉強する青年会があることが多いのですけれども、カル

ト教団のほうがもつと熱心にやっているんです。みなさんも気をつけてください。オンラインで、「分かりやすい聖書講座」とか、「一発で分かる仏教の教え」とか、そういうような名前の講座がアップされてますけど、調べてみると一〇個のうち二つくらいはカルトです。カルトは熱心に布教したり、勉強会をしたりしています。それに比べて伝統教団は、何とこのかな、薬にも毒にもならないような、そんなふうに若者の目には映っていて、相談したり、勉強したりする所ではない、というところがあります。それに責任はないのかな？と思わないわけでもないんです。若者の悩みに耳を傾けようとしなない宗教者たち。形骸化して風景となり果ててしまったお寺に関わっているのが自分である、ということに気づかない。「あんな事件を起こしたのだから死刑にしろ」。そこしか見えないということがあると思います。しょせん、他人事としか見ていない。ところが、井上嘉浩くんのご両親はそういうわけにはいかないわけです。

今からある番組を紹介しますが、その中で、井上くんのお父さんは、息子の罪の一端は私にもあるんだということをおっしゃっています。ただ、ここで一つだけ誤解を解いておきたいのですが、私は井上くんが死刑になった後、子供さんがカルト教団に入信してしまって困っておられるご家族の相談を受けたりしましたけど、家庭に問題があったか

らカルトに行くということは、私が出会った限り、実はそんなに多くありません。勧誘の仕方が非常に上手く、最初は宗教に関心がなくても、知らない間にずるずる…となっちゃったというパターンが多いんです。だから、「子供がカルトに入った」と言った時に、「それはあなたの家庭に問題があったんだろう」「あなたの家庭が安らげる場所じゃなかったんじゃないのか」と言うと、家族は二重に苦しむことになります。息子がカルトに入ったことに苦しみ、自分に責任があるということにも苦しむことになるんですね。でも、井上嘉浩くんの場合は、本人も、ご両親も、「家庭に問題があった」と言っているわけです。

これは、今年の五月十七日に北陸朝日放送、石川県と富山県だけ、しかも、午前二時から三時に放送された『贖罪　〜オウム死刑囚　父の手記〜』という番組です。これは四六分間の番組なので、所々で切りながら、私の説明とか、話したいことを入れていきたいと思えます。「息子がオウム真理教に入信した責任は自分にある」と感じた父親が、息子が犯した罪とどう向き合ったか、オウムバッシングの嵐の中、父親として何を感じたか、映像を通して感じてもらえると思えます。それでは、はじめから二十二分三十秒まで見ていただくと思います。

父の手記

その日の夜のテレビの画面で、私は家内と共に、逮捕されて護送される嘉浩の姿を目にした。「よっちゃん、よっちゃん」涙声はいつまでも続いた。

ナレーション

息子の名前は井上嘉浩。オウム真理教諜報省のトップ。修行の天才。側近中の側近。と呼ばれた男。

「本日、七名の死刑を執行しました。裁判の確定順で名前を申し上げますと、麻原彰晃こと松本智津夫、早川紀代秀、井上嘉浩……」

父の手記

電話は大阪拘置所からだった。「刑が執行されました」。事務的な係官の言葉が私の耳に届いた。

ナレーション

二〇一八年に死刑が執行された井上嘉浩の父が、二十四年間に渡って書き綴った手記です。四〇〇字詰め原稿用紙、およそ一〇〇〇枚分になります。

父の手記

嘉浩は罪人であった。どのような理由があろうと、人間としてけっしてやってはいけないことに手を染めていった。

ナレーション

「君が師と仰ぐ人物はそれに値しない」。強い言葉でオウム脱会を呼び掛けたこと。幼い頃の写真に、なんとしてもあの時代に戻りたいと涙したこと。食事は足りているか。風邪を引いていないか。と、独房の息子を気遣う親心も滲みます。

父の手記

君の立場と代わることができのなら、今からでもすぐに代わってあげたい。

ナレーション

父は、息子をオウムに追いやった原因は家庭にあったと考えていました。

父の手記

私は、父親としても完全に失格だった。嘉浩の子どもの頃を書くということは、まずはじめに自分たち親のことを書くことに繋がる。嘉浩がどうしてオウムに魅かれていったかを明らかにするためには、そのことをはっきりしなければ意味がないからだ。

ナレーション

償うとは何か。オウム死刑囚、父の手記です。

石川県かほく市の真宗大谷派 浄専寺。平野喜之住職は、京都生まれですが、養子として浄専寺に入り寺を継ぎました。井上嘉浩は京都の仏教系の高校の同窓生です。支援グループの事務局長として、罪を償う手助けをしてきました。

平野

彼にしかできない真相解明であるとか、彼にしかできないオウム入信者に脱会を呼び掛けるとか、彼にはそういう使命があったと思うんですけども、それを果たすことが償うということになったとも思いますし…、

これ（父の手記）なんですけれども、去年の十一月に嘉浩くんのお父さんがこれを書き終えられたそうですけれども。嘉浩くんのお父さんの曰くには、これを息子の嘉浩と一緒に読みたかったとおっしゃっておられました。

ナレーシヨン

手記を読み、平野さんは公開することを決めました。

平野

なぜ、お父さんが手記を書かれたのかということ考えた時に、そこには被害者に対する詫びたいという気持ち、あるいは息子に対する詫びたいという気持ち、こういうものを伝えたいという気持ちがあったと思います。その気持ちを汲んで、嘉浩くんは

もういないですけれども、やはりこの手記が公開されることによって、被害者に対して詫びたいという父親の気持ちや伝わるんじゃないかなと思ひまして公開させていただきました。

ナレーション

嘉浩に死刑が執行された今、手記の公開が、情状や減刑を得るためではないと分かっ
てもらえると考えました。

父の後ろ姿です。一九三一年生まれ。八十歳を超えました。手記の番組での公開には
同意しましたが、顔の撮影やインタビューは頑なに拒みしました。

手記は、一九九五年から始まります。三月二十日。地下鉄でサリンが撒かれ、乗客や
駅員、十三人が死亡。およそ六三〇〇人が負傷しました。

父の手記

平成七年五月十二日の夕刊に、あの忌まわしい地下鉄サリン事件の現場を指揮したの
が、こともあろうに私の息子だと、警視庁が断定したという記事が掲載されたのであ

る。もう何もかも終わったと、私は思った。これまでの私の人生は一体なんだったんだ。殺人者の父。これがこれから私が背負って生きなければならない十字架となつて、目の前に横たわっていた。

ナレーション

報道は、オウム一色に染まりました。

「私たちの目的が、先生の教えを受けて、解脱、悟りを得ることに向かつていくことですから……」

嘉浩は、柴犬の太郎を弟のように可愛がっていました。

父の手記

まだ高校生の頃、嘉浩は学校から戻ると、いつも太郎を散歩に連れて行っていた。いつものまにか、わが家の太郎は「オウムの太郎」と呼ばれるようになった。わが家も人呼んで「オウムの家」というわけだった。何も知らない小学生たちが、「オウムの家、オウムの家」と指差しながら通っていく。

ナレーション

一九九五年五月十五日、井上嘉浩逮捕。およそ二カ月の逃亡生活でした。

父の手記

この日の夕刊は、どれもこれも一面に「諜報省大臣逮捕」の大見出しで飾られた。この日の夜のテレビの画面で、私は家内と共に逮捕されて護送される嘉浩の姿を目にした。後方の座席で、護送担当の係官に挟まって、じっと前を向いて座っている嘉浩の姿に、以前の面影はすっかり消えていた。突然、家内が二階の嘉浩の部屋に入り号泣し始めた。「よっちゃん、よっちゃん」涙声はいつまでも続いた。

ナレーション

井上嘉浩は、一九六九年、京都市で生まれました。父は手記で、「家庭に心安らぐ場所はなかった」と記しています。

父の手記

土産物の卸をしていた弟が事業に失敗したことから、銀行からの借入金の保証人となっていた私は、一夜のうちに、その保証人としての債務を引き受けることとなった。このことは、その後の私たちの夫婦間に修復しがたい大きな溝を作ることとなった。何かことがあると、家内はそのことを口に出して、私に食ってかかった。私も若かった。「兄が弟のことを考えているのは当然じゃないか」とばかり、家内を罵倒した。そんな時、家の中は地獄そのものだった。

ナレーション

ある日、嘉浩が幼稚園から帰ると、母が台所でガス自殺を図っていました。母は「死なして、ほっといて」と叫び、救急車に運び込まれました。発作的な行動で一命は取り留めましたが、それ以来、嘉浩は母のそばを離れないようになったとふり返りま

す。

嘉浩が十四歳の時に書いた詩です。出家後に部屋で見つけました。

父の手記

『願望』と題したその本には、中学生であった頃の嘉浩の心情がはつきりと述べられてあった。「おれたちは本当に幸せなのか この泥の世界 金さえあれば何もかも手に入る 朝夕のラッシュアワー 時に繋がれた中年たち 夢を失い ちっぽけな金にしがみつき ぶら下がっているだけの大人たち 救われないぜ これがおれたちの明日ならば」

ナレーション

父は手記のタイトルを『願望』としました。自らに突きつけられた言葉のように思えたからです。

父の手記

嘉浩はその頃から宗教に興味があったようだ。禅、仙道、そして密教。それらに関する本が、今なお、嘉浩の部屋の本棚に並べられている。人生の最も多感な時を迎えている少年の気持ちを、父親として全く理解できていなかったのだ。

ナレーション

嘉浩は、京都でもトップクラスの進学校へ進みました。高校二年の時にオウム真理教の前身である、「オウム神仙の会」に入会しました。卒業アルバムに書いたイラストです。空中を飛べると信じていた青年は、卒業後、一旦、大学に進学するものの、中退し、出家しました。母は息子に会いたい一心でオウムに入信し、セミナーに通ったこともありました。

教団は、真理党を結成。一九九〇年の衆院選では、教団幹部ら二五人が立候補しました。しかし、全員落選。これを機に教団の武装化が進んだとされます。

救済の名の下に、次々と事件が起こされました。目黒公証役場事務長逮捕監禁致死事件、地下鉄サリン事件、東京都庁小包爆弾事件…、嘉浩は九つの事件で起訴されました。

始まった裁判。父は情状酌量の証人として法廷にも立ちました。

父の手記

名前が呼ばれ、私は証人席へと足を運んだ。私は子どもに対して、父親としての配慮

が全くなされていなかったことを話し、事件の責任の一端は父親である私にあることを話した。事実、私はそのように思っていた。子どもの最も多感な時期に、父親としてなすべき義務を怠っていた私には、その責任を負う義務があることは、誰の目にも明らかなことであった。

ナレーション

言いわたされた判決。一審は無期懲役。しかし、二審はこれを破棄。地下鉄サリン事件では、総合調整役で、散布役と責任は同等として、死刑を言いわたしました。嘉浩は死刑判決を不服として最高裁に上告しました。

かほく市の住職 平野喜之さんは、井上嘉浩の五歳上で、京都の仏教系の高校の同窓生です。高校時代の宗教の教師から「嘉浩くんを支えて欲しい」と言われたのがきっかけで、面会や手紙のやりとりが始まりました。嘉浩が平野さんに送った手紙です。「人にとって救いとは、いったい何なのでしょう。その答えがあると自惚れたことが、私がオウムに入り、大罪を犯しました原因の一つであると、今私は考えています。私の犯しました罪は、計り知れません。」

二〇〇七年に、「生きて罪を償う」井上嘉浩さんを死刑から守る会を設立しました。平野さんが事務局長となり、償うとは何か、問い続けてきました。罪を償う会が発行してきた機関誌『悲』です。慈悲の悲。仏教で、他人の苦しみを取り除く、哀れみの心を意味します。平野さんは『悲』の中で、嘉浩の言葉を発信してきました。

「麻原は、人間を、救うものと救われるもの、非凡人と凡人の、上下に区別する傲慢さに基づいて、社会の法律を踏み越えていく権力、権威を神から委託されたと正当化していきました。そして、麻原は、自分を神のような超越的存在であるかのように妄信し、自分が想像した神と同一化することで、自分の野望を神の命令のごとくに信者に命じました。」

—— 動画再生終了 ——

半分ほど見ていただきました。井上嘉浩くんが罪を償っていかうとしていく中で、いろんな支援者が現れてくるわけですが、その中には、加害者である井上くんに自分自身を重ねる、自分の人生を重ねる人たちが現れてきました。一人や二人ではないんですが、代表的な例が、真宗大谷派の僧侶である鈴木君代さんです。この方は僧侶であり、シンガーソ

ングライターでもあります。おそらく私より圧倒的に多く、井上くんにも面会されていると思います。今からお見せする映像にも出てきますけれども、鈴木君代さんは小さい頃、お父さんと生き別れてしまって、小学校でも「あんな、お父さんのいない子と遊んだらあかんよ」と言われたりして、感情的にも揺れが激しかったり、苦しみ悩んだりしていた時に、あるお坊さんに出会ったそうです。後で、どういうことを説くお坊さんと出会ったかが出てきますが、「井上くんみたいに、もし最初に出会った人が麻原彰晃だったら、私もまた同じ道を辿ってしまったかもしれない」「アクリル板の向こうにいるのは、もしかしたら私だったかもしれない」と、こんなふうには彼女は考えました。

ここから先は、細切れに動画を見ていただきたいと思います。

——動画再生——

ナレーション

この機関誌がきっかけで嘉浩の支援を始めた女性がいました。鈴木君代さんです。鈴木さんは、京都の東本願寺で僧侶として働く傍ら、バンドを組んで歌い続けています。

♪お坊さんに憧れてお寺に入ったの

黒い衣姿に心惹かれて

お坊さんが好きだからお寺に入ったの

みんなに「なんでや？」って聞かれたけど…

ナレーション

サラリーマン家庭に生まれた鈴木さんが僧侶になったきっかけも、嘉浩の支援を始めた理由も、彼女の生い立ちが大きく影響しています。

鈴木

私も、京都生まれ、京都育ちなんですけど、六歳の時に両親が離婚していて、そのことで、仲の良かった友達から「あんたとは今日から遊べない」と言われて、「何で遊べへんのや」と言ったら、「お父さんのいない子とは遊ぶなとお母さんに言われた」って。私はそれでちよっと体調が悪くなって、学校でバタンと倒れたりするようになって、どうすることもできなくなっって、あるお寺に預けられたんですね。その時にお

寺のお坊さんに、「セミの命も、アリの命も、草花の命も、人間の命と同じなんだ」と言われて。その時、私は何のために生まれてきたのか分からなくて、お坊さんだったら何のために生まれてきたのか教えてくれると思って、仏教を勉強するようになって……、

ナレーション

鈴木さんには、嘉浩の悩みが人ごとには思えませんでした。

鈴木

井上さんも同じような時に、同じように京都で悩んでたから、あ、これ、出会う人が違ったら、もしかしたらアクリル板の向こうにいるのは私かもしれないと思って、その思いが強かって。だから、いつもそうですね。これは私のことやったかもしれないなと思って、会い続けてきましたね。

—— 動画再生終了 ——

みなさん、アクリル板の向こうという意味が分かりますか。拘置所に面会に行くと、係員がいて、アクリル板の向こうに、拘置所にいる未決囚とか、死刑囚が現れて、十五分だけお話をさせていただくんです。アクリル板の向こうに自分がいたんじゃないのか、というのは、出会う人が違えば自分も同じような罪を犯して拘置所にいたかもしれないという意味です。

麻原彰晃は、救うものと救われるもの、救うものは宗教的に立派である、救われるものは弱者、弱い立場なんだと、宗教という名の下に差別を肯定するような考え方からスタートしていますが、鈴木君代さんは、「セミの命も、人間の命も平等なんだ」というお坊さんに会われて、それに惹かれて宗教者の道を歩まれました。どんなお坊さんに会って、どんな教えの下で歩み出すかで、随分人生は変わってしまうものだなと感じます。

鈴木君代さんは、井上嘉浩さんと面会を繰り返し、彼を支援していたんですが、実は、逆に、自分の悩みや苦ししみも井上くんに聞いてもらっていたんですね。つまり、井上くんに人生を支援してもらっていたということになります。

私は今、九州にいる死刑囚の（面会は出来ないんですけど）支援をしているんですが、死刑囚は、罪と向き合いながら、拘置所の中で人間的に成長していくことがあります。人

間だから成長するのは当たり前だと思われれるかもしれませんが、死刑囚が、拘留所の中で、本を読んだり、自分のしたことをふり返ったりしながら、悔い、成長しているということをお伝えしなすことがなかつたんです。私は浄土真宗の僧侶ですから、その発想でみなさんにお伝えしますと、罪を犯したり、人を傷つけたりした「痛み」が、人間を育てていくと思つています。私たちはそれを誤魔化して生きているかもしれないませんが、死刑囚はそこから逃げることは出来ません。

そして、君代さんから話を聞いたり、井上さんと面会したりしていくうちに、罪と向き合つて生きなおそうとしている人を、殺す意味はどこにあるんだろうかと思ひ始めたわけです。死刑というものに関心がなかつた私でも、そういう姿を見ているうちに、どうしてこの人を殺さなくてはいけないんだろうな、何のためなのかな、と考えはじめたんですね。

ここで、もうちょっと映像の続きを見てもらいたいと思います。

ナレーション

鈴木さんから支援者は、無期判決を求める嘆願書の署名を集め、最高裁に提出しました。しかし、願いは届きませんでした。二〇〇九年二月、最高裁は上告を棄却し、死刑判決が確定しました。

父の手記

判決文は、至極簡単なものだった。判決を聞きながら、嘉浩はこの後、弁護団からの知らせをどのような思いで受けとるのかと考えると、胸がいっぱいになった。

「翌日、午前中に両親が面会に来てくださいました。両親がぐったりとしつつ、それでも気丈に振る舞う姿を見て、涙をこらえるのが精一杯でした。父母が『自分たちが悪かった』と、何の責任もないのに、自分たちを責める姿を見て、本当に申しわけないと、ただただ、申し訳ないと、言葉がありませんでした。」

ナレーション

死刑が確定した嘉浩に、こんな言葉を送った人がいました。「まず、なすべきことは、死刑の判決をしっかりと受けとめることです。思えば人間は、誰でも死刑を宣告されて生まれてくるのです。」仏教学者の児玉暁洋さんです。真宗大谷派教学研究所元所長で、「罪を償う会」の代表でした。嘉浩が心の支えとした人物です。しかし、児玉さんとの手紙のやり取りも制限されるようになります。

「房の広さは、横は両手を水平に伸ばしたぐらい。縦は横の二倍ちょっとです。奥にトイレと手洗いがついています。ですので、動けるのは書類などもあり、蒲団一枚分ぐらいです。起床は七時。就寝は二十一時です。」

ナレーション

二〇一〇年、井上嘉浩の確定死刑囚としての日々が始まりました。

父の手記

一月十三日、この年、嘉浩から来た手紙の中で、私は、改めて死刑囚であることの意味を、思い知らされることとなった。嘉浩は次のように記してきた。

「死刑囚は執行する目的のために、父母では到底想像できない制限、そしてルールが張り巡らされているのです。」

外部交通者は五名と親族なのです。つまり、執行のための心情安定にプラスに作用すること以外は、一切、認められないのです。

ナレーション

外部交通とは、面会や親書のやりとりなど、外部との接触のことです。原則として、親族と、拘置所に申請し認められた人に限られます。手紙の隅に押された二重丸は、拘置所の検閲印で、手紙の内容もチェックされます。嘉浩は両親へこんな手紙を送りました。

「二月一日付けで、確定処遇となりました。二日付けで家へ手紙を出したのですが、書き直すように、本日四日、指導されました。」

父には、黒塗りの手紙が届きました。嘉浩の外部交通が認められたのは、親族以外では、平野さん、鈴木さんら、四人でした。平野さんが嘉浩に、ある女性支援者の言葉を伝えようと出した手紙が、黒塗りになりました。その支援者に外部交通権がなかったことが理由ではないかと、平野さんは言います。

平野

井上くんとこのやりとりは、黒塗りが結構あったわけですね。どこで黒塗りをされたかと言いますと、私以外の人たちの言葉を伝えようとした時に、それが私以外の、他者からの伝言だということで、その名前、言葉を消されたわけです。

ナレーション

「罪を償う会」の代表、児玉さんの言葉を伝えることも難しくなりました。

平野

会の先生方の言葉を井上くんに伝えたいと、例えば、児玉先生の言葉、あるいは菱木

先生の言葉を伝えたいと思って書いたわけですが、それが黒塗りにされていて、そこで私が工夫しましたのは、「こういう言葉がこだましていたよ」といった時は、児玉先生の言葉だし、「こういう声私の心の中でひしめいていたよ」といった時は、菱木先生の言葉だと、工夫をいたしまして、それで井上くんに会の先生方の言葉を伝える努力をしたわけですけれども。

ナレーション

二〇一五年に採択された、国連の被拘禁者処遇最低基準。死刑囚や受刑者の人権を守ることを定めた規則です。規則では、外部との手紙のやり取りや、面会は許されなければならぬとしていて、日本も国連決議を支持していますが保証されていないのが現状です。

父の手記

嘉浩は、手紙で死刑囚としての自らの気持ちを、次のように記してきた。「死刑囚は、死を意識することから逃げることはできません。死への恐怖からパニックとなり、自

らを見失い、廃人同然になるか、恐怖に耐え抜くか、恐怖の正体を知り抜くかしかないようです。外部交通の制限は、死刑囚の人間性を喪失させる以外の何ものでもありません。」

—— 動画再生終了 ——

それでは、外部交通について少しお話をしていきます。例えば、私とのやり取りの中でも、児玉先生の言葉を伝えようとしたら、黒塗りにされることになったんです。児玉先生は、井上くんにとって「心の師」だったんですけれども。私がそこで疑問に思いますのは、児玉先生とか、支援者たちとの交流が制限されなければならぬ理由とは一体何だろうかということなんです。拘置所側は、「心情の安定」のためだと言うんですが、私はむしろ、心情の安定のためには、心の師との交流や、支援者たちとの交流が必要だと思うんです。全然理屈が通ってないなと思えました。死刑囚の人権は守られなくてもいいのかと。国連はそれを守れと言っていますが、日本ではそれがなされていないんです。死刑囚だったら人間性を喪失させてもいいのか。そういうことを感じました。

我々でも、死刑囚でも、罪と向き合い、罪の重さを自覚し、実感するようになるために

は、やはり、先生や師と出会ったり、友達と出会いながら、人間的に成長していくということがなければ、なかなか難しいと思います。外部交通権の制限は、むしろ、人間として成長することの妨げになっているのではないだろうかと思っております。

私たちの会は「罪を償う」ことが主眼でしたけれども、罪を償うことの大前提として、罪の重さを実感したり、自覚したりすることがなければなりません。そのために私は、被害者が望めば、被害者との交流も許されるべきだと思っておりますが、外部交通権の制限は、被害者との交流の壁にもなっていると思います。つまり、罪を償うことの妨げになっているのではないだろうかと感じております。罪を償うとはどういうことか、次の映像の中で語っておりますので、ちょっと見てくださいね。

—— 動画再生 ——

ナレーション

平野さんは、外部交通の制限に疑問を感じています。被害者と加害者の面会が実現すれば、償いのあり方が変わる可能性があると考えています。

平野

妹さんがサリン中毒に遭われたお兄さんのお話なんですけど、「加害者を恨み続けるような人生は、決して幸せな人生じゃない」と言っておられたわけです。その言葉が強烈に印象に残っております。私もずっと、罪を償うということはどういうことか、考え続けたんですけど、まず第一に、加害者が自分のやったことについての罪の重さを感じて、それを言葉にして伝えていくということが大前提なわけですけども、それを伝える相手として一番大事なのは被害者だと思います。その被害者もし加害者に会うことが出来て、そして、加害者の真摯な反省の姿勢を目の当たりにするならば、やはり被害者の方も変わってくる可能性があると思います。加害者と被害者の関係が変わるといことが、償うということのとても大きな意味だと思っております。

ナレーション

嘉浩は、目黒公証役場事務長の監禁致死事件に事実誤認があるとして、裁判のやり直しを求めました。しかし、再審請求が受理された二〇一八年三月十四日、嘉浩は東京から大阪拘置所へ移送されました。

「大阪拘置所への移送中、東名の景色を眺めながら、十八歳の春、東京へ向かった時のことを思い出しました。それから三十年。一体何をやってきたのだろうか、遠くの青空を見つめるばかりでした。故郷の愛宕山と、桂川の光景を目にした時は、胸が震えました。」

この日、オウム死刑囚十三人のうち七人が、大阪や名古屋など全国五ヶ所の拘置所に移送されました。一月に一連のオウム裁判が終結したことから、死刑執行の準備ではないかとの憶測が広がりました。

父は、可能な限り、大阪拘置所への接見を続けました。

父の手記

七月三日。いつもの通り、大川を左に、拘置所へと足を進めた。曇りとはいえ、夏は盛りである。汗が体中に染み渡る。徒歩で十五分あまりとはいえ、真夏の歩行は体力に大きな負担がかかる。

ナレーション

嘉浩は、菌の治療もままならぬこと、父は、母の様子などを話し、十五分あまりの接見が終わりました。その三日後でした。

「本日、七名の死刑を執行しました。裁判の確定順で名前を申し上げますと、麻原彰晃こと松本智津夫、早川紀代秀、井上嘉浩……」

父の手記

電話は大阪拘置所からであった。「刑が執行されました。」事務的な係官の言葉が私の耳に届いた。「わかっていきます。今、テレビで知りました」と、私は応えた。「嘉浩さんは毅然とした態度でした。最後にあたって、『お父さん、お母さん、ありがとう。心配しないで。まずはよし』との言付けがありました」という拘置所の係官の言葉を、私は、ただただ呆然として聞いていた。

ナレーション

父には、再審請求中の死刑執行はないという思いがありました。しかし、それが考慮

されることはありませんでした。

「再審請求に關しましては、再審請求を行っているから執行しないということを考えてというのとはとっておりません。」

井上嘉浩。享年四十八。

—— 動画再生終了 ——

井上嘉浩さんに死刑が執行されました。その後、ご遺体をどうするかということで、家でいろいろ相談されました。拘置所で茶毘に付す方法もあり、それだと国がお金を出してくれるんですが、井上嘉浩さんの生前の希望として、「一度家に帰りたい」とおっしゃっていましたので、先ほど出てきましたシンガーソングライターの鈴木君代さんが、お母さんを車に乗せて大阪拘置所に行かれました。なぜそうなったかという点、当日は、あの鴨川が氾濫するんじゃないかと言われるくらい信じられないほどの大雨で、交通機関がかなり制限されていたんです。

君代さんは刑務官から井上くんの最後の言葉も聞いています。「お父さん、お母さん、ありがとうございました」。そして、「こんなことになるとは思っていなかった」というの

が、最後の言葉には含まれていました。そして「心配しないで」「まずはよし」。何が「まずはよし」なのか私もちょっと良くわからないですね。そして、その日の夜に、京都の真宗大谷派の岡崎別院で、鈴木君代さんが導師をされてお通夜が執り行われました。後で映像が出てきます。井上嘉浩くんの場合、逮捕されてからというより、オウムに出家してから後の写真が全然なかったのです。鈴木君代さんが面会をした時に描いた似顔絵を遺影として、お通夜、お葬式が執り行われました。心の師である児玉暁洋先生のお通夜、お葬式も岡崎別院でした。お葬式の導師は私がさせていただきました。本当に親しい支援者だけが参加しました。一〇名もいなかったですね。その時、門田隆将という作家が、いろいろメモったりされていたので、「何してはるんかな」と思ったら、それを本にしようと思ってはったんですね。だから、私がお葬式の時にした話も全て本の中に出てくるので、「ああ、私はこんなことを話したんだな」と後から分かったわけです。私がお葬式の時三分ほど話した内容をお伝えします。

平野

井上嘉浩くんは、やはり生きて罪を償いたかったと思います。それが殺されて中断さ

れたということ、悔しいという気持ちもあります。それは、死刑というものが、殺すという意味も持っているからです。本当は生きて罪を償いたかったのです。

彼は大罪を犯しましたけれども、しかし、罪を償おうという気持ちは、まことに尊いものだったと思います。それが中断されてしまったということに、私は悔しさを感じます。

井上嘉浩くんは、罪を償っていくことに、二十三年間、大変、頑張られました。本当にご苦労さんだったと思います。

しかし、これから私たちは、井上嘉浩くんの志を受けて、カルトによる不幸に見舞われる人が出ないように、彼の願いを受けて、歩み続けていきたいと思っています。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏：

「生きて罪を償う」井上嘉浩さんを死刑から守る会は、死刑から守れなかったというところで、死刑が執行された二〇一八年の十二月に解散しました。それから三カ月、どうしようかなと考えたんですけれども、いろんな出来事がありました。二〇一九年四月八日、お釈迦様の誕生日に、井上嘉浩くんの身体はなくなってしまうけれど、願いは生きている

んじゃないかということで、その願いを背負って歩いていこうと、「compassion」という会を作りました。先ほどはテレビ的な説明で上から目線で「哀れみを…」と言っていましたけれども、児玉先生が言っていた compassion は、com は company の com で、一緒にという意味、passion は情念という意味です。鈴木大拙という宗教学者が、阿弥陀さんの「悲」を翻訳する時に、sorry や sad という言葉を使わずに compassion を使われたんですね。阿弥陀さんは、悟りの座を捨てて、衆生の悩み苦しみに共感して生きていこうとされました。私たち凡夫は他人の悩みや苦しみに共感することは難しいですけれども、阿弥陀さんを真似て、悩んだり苦しんだりしている人と共に歩んでいこうということで、compassion という名前にしました。井上嘉浩さんと共にカルト被害のない社会を願う会を設立したわけです。お葬式の時の約束を実行したわけですね。

その後、井上くんのお父さんが一言話されました。

父の言葉

嘉浩の父親でございます。昨夜、嘉浩が初めて家に帰ってまいりました。家内とともに、鈴木さんに一緒に拘置所に行っていたいただきました。そのあと、葬儀屋さんが自宅

に運んでくださいました。そこで私どもは、親子四人で、一夜を明かすことができず
ました。まさか、肉体のままの嘉浩と一緒に過ごすことができるとは、夢にも思いま
せませんでした。そして、昨夜は、ここ（遺体が安置されていた岡崎別院の一室）で、四
人一緒に寝ました。嘉浩は、やっと、母親の隣で寝ることができたのです。一晩中、
一緒でした。もちろん、眠ることはできません。兄が、棺に「よっちゃん、よっち
ゃん、よく頑張ったね。よく頑張ったね」と…。多くの方を苦しめ、多くのご家族を苦
しめていることを、あらためて考えました。心から、本当に心から、被害者の方々の
ご冥福をお祈りしたいと思います。

と、こういう言葉で終わっているんですね。井上嘉浩くんのお父さんは、いつも頭の中で
被害者の人に対して申し訳ないと思っているのです、自分の息子が死刑になってこんな辛
いんだから、自分の息子が関わった犯罪に巻き込まれたご家族はどれだけ辛かったらう
と、最後は自分の子どもに対してじゃなくて、被害者の方々のご冥福をお祈りしたいと思
います、ということだったんです。

お葬式の場所とか、お父さんの言葉を思い出しながら話をしています。今からの三分が

最後の動画になりますので、見ていただきたいと思います。

——動画再生——

鈴木

ここが祭壇だったんですよ。ここにね、よっちゃんの遺体はここにありました。で、ご本尊があつて、ここに遺影を掲げて…。

ナレーション

京都の岡崎別院で、通夜や葬儀が営まれました。十八歳で出家した嘉浩には、遺影に相応しい写真はありませんでした。そのため、支援者の鈴木君代さんが似顔絵を描き、遺影として掲げました。

鈴木

十六歳でオウム真理教に入信されるから、十六歳までの写真しかないのです、十六歳の写真では…っていうので、みんなで写真を選んでたんですけど、なくて、お父さん

が、「あ、君代さんが描いてくれた、これがよっちゃんに一番近いんじゃないか」って言われて。

ナレーション

葬儀の導師を務めたのは平野さんでした。父の、その日の言葉を今も覚えています。

平野

息子が死刑になって、目の前に遺体があると。それが非常に悲しいと、いうことをまづ申されまして、その悲しさを思うと、息子がオウムに入信して、たくさんの人たちに、家族に辛い目に会わせたといい悲しさを思うんだ、という話をしておられます、お父さんはやはり、自分の辛さがそのまま被害者の辛さとすぐに連想されるといふところが、お父さんの罪を償いたい、被害者に対して申し訳ないという気持ちの表れだなと思いました。

ナレーション

父は最後のページに、被害者への償い、そして、嘉浩への贖罪の言葉をしたため、ペンを置きました。

父の手記

嘉浩は罪人であった。どのような理由があろうと、人間としてやってやってはいけないことに手を染めていった。この世に生まれ、何一つ法に触れることなしに、真面目に生きていた人たち、そして、その家族の方々を不幸のどん底に追いやっていった。嘉浩のなした罪は、父親である私の罪でもある。

ナレーション

死刑が執行されて三週間後、大阪拘置所から十八個の荷物が届きました。蒲団、衣類、膨大な裁判記録、本、支援者が送った手紙などです。償うとは何か。遺品を整理しながら息子と向き合う日々が続きます。

—— 動画再生終了 ——

それでは、そろそろ私の話も終わりになりますけれども、井上くんが亡くなった後に、いまでも考え続けている問題について、お話をしてみたいなと思います。たくさんあるんですけれども、三つにしぼってお話します。

一つ目は、罪を償うとか、罪を贖うとはどういうことなんでしょうかということです。私は加害者の井上くんが被害者に償いをする手伝いをするつもりで始めました。しかし、オウム事件と向き合っているうちに、当時のマスコミがオウムを持ち上げるような報道をしていたり、宗教学者がオウムを褒めたり、そういうことがオウムを増長させるきっかけになっていっているなということも思いました。オウムの信者は、形骸化していたお寺を尋ねて、そこで失望してオウムに入ったということもあります。誰が誰に償うのか、井上嘉浩くんが被害者に償えばそれで済むのかな？とも思いました。加害者が被害者に償うのは当然だけれども、それだけでいいのだろうか、それで完結するのだろうかということを考えました。

二つ目に、死刑は罪の償いになるのだろうかと考えました。今日は時間がなくてみなさんにお見せできませんでしたが、ちょうど一年前に、『オウム死刑囚 一八八通の手紙』という番組を同じディレクターが作りまして、その中で、拉致されてサティアンで

殺された假谷清志さんの息子さんと私が、東京のご自宅で直接お会いして、その時にどんな話をしたか、ということが取り上げられているんですけれども、その時に息子さんは、「私は死刑が償いにはならないと思ってる」と言っておられたんですね。特にオウム事件は刑事裁判で裁かれたので、「死刑は国家に対する償いかもしれないけど、被害者に対して償われたとは私は全然思わない。私は、加害者本人や加害者のご家族が被害者である私にどんな償いをしてくれるのかということに関心があつた。死刑になったから償われたとは全然思わない。ただ、死刑が心の一区切りにはなつた」と、いつまでもお父さんの事件を引きずっているんじゃないかと、死刑が執行されたことが心の区切りになって、新しいステップを踏み出すきっかけにはなつたけども、償われたとは思っていないとおっしゃられました。私が「井上さんと假谷さんが面会された時に、どんな話をしたんですか」と聞いたら、「井上は、自分の罪と向き合うと言っていた。私は、それはあなたの心の中でずっと考えているだけであつて、どんなことを考えているのか伝わらないよ。罪と向き合うというなら、どんなことを考えているのか発信してほしい」ということを彼に言ったんだと。「彼は、支援者の力を借りてだけれども、機関誌を出しながら、そこで自分がどんなふうに罪と向き合っているかということを発信し続けた。それに関しては思ったことをや

つてくれてるなと思いましたが」とおっしゃいました。そして、私平野は新しく会を立ち上げて、井上くんの意志を継いでいきたいんだと言った時にはすごく喜んでくださった。それで機関誌ができれば送るといふことになっております。

それと、これが今の私の究極の問いで答えが出ないんですけれども、三つ目は、人を殺すということが許される場合があるのだろうか、ということなんです。死刑を執行する側も理由はどうであれ、人を殺していることになりません。死刑になる人は、確かに非常に重い罪を犯しているのですよね。じゃあ、重い罪を犯した人なら殺してもいいのよか。私にとつてはいまだに疑問です。重い罪を犯した人なら殺してもいいという考え方を突き詰めていくと、「生きる値打ちのある命」と、「殺していい命」があるんだという考え方になるんじゃないかなと思います。人の命にそんな区別があつていいのだからかと思つています。私はそういう区別があつては良くないという立場なんですけど、みなさんも一度考えてみてほしいと思います。

最後に申したいことは、罪を犯した人たちにも、罪を犯すまでの人生があり、罪を犯した後に悩み続けています。死刑を「点」で見ないでほしいと思います。死刑判決が下つたという「一点」と、死刑が施行されたという「一点」で見るとは、死刑判決が下る

までのその人の人生、そして、判決が下った後のその人の人生がどうだったのか、一人の人生を「線」で見えてほしいんです。そして、その人を取り巻く、ご家族とか、高校時代の同級生とか、支援する人とか、その人の「背景」にも想像を及ぼしてもらって、死刑制度という問題を、それぞれ考えていってもらいたいと思います。

これで私の話は終わらせていただきます。どうもありがとうございました。